

【水の作文大賞】

贈り物を引き継ぐ

熊本県 熊本市立出水中学校 三年 森野 りん

熊本の水はおいしいと周りの人は言う。暑い夏の日。学校から走って帰宅する。喉はカラカラ。汗はびっしょり。家に帰ると、すぐさま台所に駆け込む。蛇口をひねってコップに水をたっぷりと注ぐ。それを一気に飲み干す。体にスーッと染み渡るような感覚。冷たくて、おいしい！水のおいしさって、こういうことなんだ。

最近、よく耳にする言葉「SDGs」。十七項目の目標の一つに「安全な水とトイレを世界中に」というものがある。これを見たときに、一つ疑問に思った。「安全な水を飲めない国なんてそんなにたくさんあるの？」世界の水について興味を持った私は、実際に調べることにした。

調べてみると、世界の水には残酷な現状があることがわかった。まず衝撃的だったのが、安全な飲み水を手に入れない人が世界に約二十二億人もいるということだ。世界のほとんどの国は、コストがかかることやインフラの整備が追いついていないことから、水を提供するのが難しい。また、水質汚染も原因の一つだと言われる。特にアフリカやアジアの多くの途上国では、池や川などの茶色く濁っていて細菌や動物のふん尿までもが混ざっているという危険な水を飲まないと生活できない状況に置かれているという。そのような水を飲んで病気にかかり、命を落とす子供が毎日後をたないそうだ。水を汲むのも女性や子供の仕事。朝早くから夕方まで、学校で勉強する時間を犠牲にし、家族のために片道四キロの険しい道を歩いて水を汲みに行き、重いタンクを抱えてまた歩いて家に帰る。水が、人々の貴重な時間や大切な命までもを奪っているという事実には、私は言葉を失った。

それに比べて、日本はいつでもどこでも、蛇口をひねれば当たり前のように安全な水が出てきて、それを直接飲むことができる。飲み水だけでなく、トイレも自由に使えるし、洗濯もできるし、お風呂にだって入れる環境がある。水のおかげでおいしい野菜やお米を食べることができて、水があるから

健康で快適で不自由のない生活が送れている。それが当たり前だと思っていたが、全く当たり前ではないことを学んだ。

安全な水が使える地域格差があつていいものだろうか。ずっと先の未来で水に困るような社会があつていいものだろうか。いや、いけない。私たちが今使っている水は、私たちの先祖が守り引き継いでくれた「贈り物」だ。地球上の全ての人が、水をみんなでも共有し大切に使い、次は私たちが水を「贈り物」として未来へ引き継がなくてはならない。きっと、熊本のおいしい水もそんな「贈り物」なんだ。

水を未来へ引き継ぐためには、自分にできることから考えて動く「考動」が必要だと思う。

『考動』した日本人の一人に、中村哲さんという人がいる。中村さんは、干ばつによる水不足に苦しむアフガニスタンの人々を救うため、本職が医師にもかかわらず、現地の人々とともに、無理だと言われ続けた水路建設に成功し、大地に緑を蘇らせた。安全な水が身近になると、人々の健康が守られたり、生活が豊かになったりする。中村さんのように、世界に目を向けて、困っている人に寄り添い、一緒に水問題に立ち向かうことこそが、人々の笑顔を守ることにつながるのだ。

私の「考動」は食べ残しをしないことだ。食べ残しをしないことで生活排水を減らすことができ、川や海が汚れるのを防ぐことができる。さらに、食べ残しをしないためには食べきれない分を作ればよいので、物の需要が減り、生産時の排水も抑えられ、節水ができる。

この先、世界中の人々が手を取り合い、水があることの喜びを分かち合えるために、そして、未来の子供たちが安全な水を飲めるために、私たちの『考動』の責任は大きい。